

『枕草子春曙抄』索引の形態——「類標」「類語」をめぐる——

Index Styles and the Synonyms of Makuramososhi—Shunshashyo

中西 健 治

序

枕冊子の国語学的研究と一口に言っても、そこには語彙、語法、

文体、文章や解釈文法さらには本文批判や注釈等に及ぶ種々の研究が包含されていて、そのいずれもが、今日、より深く考究がなされつつあるところである。しかしながら、総じて源氏物語のよ
うな研究史の領域とその厚さに比すれば、枕冊子のそれらは「質量ともになほださびしいものであった」⁽¹⁾ことは事実である。本稿ではそのうち、語彙・語句を中心とした研究の萌芽的狀況を示す資料のうち、「枕冊子類標」「枕草子類語」などを取りあげて検討してみた。本書が枕冊子研究史上でほとんど言及されていないこと、索引を形成する過程が窺えるのではないかと思つたこと、いかなる語句が注目されているかを知ること等が本稿執筆の動機

である。

ところで、『国書総目録』によると、枕冊子の索引に属するものとして次の書名が示されている。

- 枕草子類語まくらのことば 類索引 ⑤東大(蜻蛉日記類語・撰集抄類語と合二冊)
枕冊子類標まくらのしるいひ 類索引 ⑥池田市万侶編 ⑦宮書(類標四四)
枕草子類標まくらのしるいひ 類索引 ⑧宮書(「異本枕草子類標」、類標二七)(類標二七)・無窮むきゆう (「枕草紙異本類標」、栄花物語類標と合一冊)

これらはいずれも春曙抄を用いて編まれた索引である。季吟のすぐれた注解を参照しつつ、編者たちはその中から自らの読解の触手を語彙の面に及ぼしながら採集し編纂したのが、この三種の索

引であり、互いの交渉もまったくないようである。いったいに江戸時代の枕冊子研究は、例えば岩崎美隆の枕草子枉園抄、前田夏蔭、賀茂真淵、橘千蔭、清水浜臣、本居宣長らの春曙抄への書入れ、孫福弘孚の枕草紙抄録等々からも明らかのように、春曙抄がほぼ絶体的な基礎文献となっていたのである。語彙等の検討にも諸本を勘案しつつ慎重に作業をすすめるという、今日であれば最も基本的かつ学問的方法も、そのような状況下にあつては、この方法を凌ぐ優位性が春曙抄にはあつたとみななければならぬ。ただ春曙抄本文について、田中重太郎氏は次のように述べておられる。

北村季吟の著、『枕草子春曙抄』は、注釈書としては、『枕草子』という作品があるかぎり、不朽の名著としていつまでも後人を益するものであるけれども、その採用本文においては、現代において、語彙語法研究のデータとして採用してはならないことを説き、いわゆる『春曙抄』本文は、一注釈書の校訂本文であることを報告しておく。²⁾

「現代において、語彙語法研究のデータ」として春曙抄本文を用いてはならないと断定される背景には、枕冊子本文研究に生涯を賭けられた田中氏の学問的結晶が滲み出ているはずで、それは逆に言えば、文献学が駆使されていなかった近世期においては、春曙抄本文の桎梏はいかに免れ難いものであつたかを意味している。春曙抄をもとに編まれた索引三種の検討はあくまで、史的考

察の範囲内である。以下、宮内庁書陵部蔵「枕冊子類標」を中心に論述し、併せて他の二書、宮内庁書陵部蔵「枕草子類標」、「東京大学総合図書館蔵「枕草子類語」にも触れておく。

(一) 書陵部本「枕冊子類標」について

本書は宮内庁書陵部に所蔵されている「類標」写本一七六巻一七九冊のうちの一で、土佐日記と合冊され、前半に土佐日記、後半に枕冊子を対象にした語句が巻・丁数と共に五十音順に整理されているものである。「枕冊子類標」の奥書は次のとおりである。

右枕のさうし類標は池田市万侶か物せるなりたし春曙抄を土代とせりこは搜索のたよりよろしければなるへし

天保十一年六月

(花押)

このことから、池田市万侶編、底本は春曙抄、天保十一年六月以前成立の三点は確認できる。ただし、池田市万侶なる人物は未詳、加えて本書の原本の成立年代も確認できない現状から、本書の全体像の把握はいさゝか鮮明さを欠くことになる。唯一、春曙抄を用いて語句採集をしていることが明らかであることから、これが手がかりとして究明していきたい。

まず、本書が掲げる約二八七〇項目の五十音別の内訳を項目数で示すと次のようになる。³⁾

わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
38	17	60	57	115	88	80	98	213	193
る	り		み	ひ	に	ち	し	き	い
13	10		122	115	30	23	106	62	132
		る	ゆ	む	ぬ	つ	す	く	う
		1	29	40	80	14	69	80	129
		ゑ		め	へ	ね	て	せ	え
		23		16	19	31	33	28	25
		を	ろ	よ	も	ほ	そ	こ	お
		39	0	46	63	54	32	112	100

いま、どのように語句を採集しているかをみておこう。上段に「春曙抄本文」、下段に「類標」の項目を示す。

いやしけなる物

しぎぶのぞうのしやく 黒き

かみのすぢふときぬのびやう

ぶのあたらしき。ふりくろみ

たるはさるいふかひなき物に

て中／＼何とも見えず。あた

らしくしたてて。桜の花おほ

くさかせて。ごふんすさなどい

いやしけなる物

式部のぞうの辭

黒き髪のうちふとき

布屏風のふりくろみたる

桜の花多くさかせて

ごふん朱砂ベニサ

色とりゑかきたる云々

やり戸

ろとりたるゑかきたる やり
 戸ずし。何もるなかものはい
 やしきなりむしろばりの車の
 おそひ けびいしのはかま
 いやすのすぢふとき 人の子
 にはうし子のふとりたる ま
 ことのいづもむしろのたゝみ
 づし
 るなかものはいやしけなり
 筵はりの車のおほひ
 けいしの袴
 いやすのすぢふとき
 法師のふとりたる
 出雲むしろのたゝみ

「巻八・一才」

「類標」は語句索引が主体であることから、右にみるような類聚的章段は全般的に多く採られ、しかも特異なもののみを対象とはしていないことがわかる。枕冊子を読む際の心覚え的な語句を中心に採集しているというべきで、右の例ではむしろ、心覚え的とみるよりも、より網羅的な態度で臨んでいるといってもよさそうである。類聚的章段が多く採られているのは、「類標」の編集方法と通うところがあるためではないかと思われる。ともかくも春曙抄を読み進めながら、注目される語句について貪欲に採集していったもののように、必ずしも一定の原則があるわけではない。掲出の方法は種々で、例えば長々しい語句を引く例（笏にしきのみさうしのすみのついちの板をせしそ）、「鶏のひなのあしたかに白うをかしけに衣短かなるさまして云々」、同一箇所を重複して掲出する場合（「かまどにまめやくべたる」を「か」の項で出

し、「ま」の項で「豆やくへたる」、「く」の項で「くへたる」と示す)、春曙抄本文を縮約したかたちで掲出する例(「かれはみたるものゝこゑ」を「かれはみたる声」、事典的な項目として掲出する例(「義懐卿出家の事」「雪の山」)、さらには春曙抄の本文以外の頭注や傍注を採って示す例などが注目される。そのうち特に後の二つの例について触れておこう。

語句を中心に採集している「類標」の中にあつて、やや特異な印象を与えるのは事典的項目の存在である。これは春曙抄の記述をそのまま掲げるのではなく、関連する記述を総括して特別な項目を掲げるもので、十例が見出される。編者の本文に対する積極的な読み取り作業がなされた結果であろう。示せば次のとおり。

- | | |
|-----------|-------------|
| ① 義懐卿出家の事 | 二ノ二十五ウ |
| ② 雪の山 | 四ノ二十二ウヨリ |
| ③ ひはの名物 | 五ノ十一オ |
| ④ 琴の名 | 五ノ十一オ |
| ⑤ 笛の名物 | 五ノ十一ウ |
| ⑥ 和琴 | 五ノ十一ウ |
| ⑦ 連歌 | 五ノ二十四オ 六ノ八ウ |
| ⑧ 屏風の名 | 十一ノ二十二オ |
| ⑨ 舟人のさま | 十二ノ二ウ |

⑩ 海士のしわざ

十二ノ三ウヨリ

①「義懐卿出家の事」とは、春曙抄本文に「さてその二十日あまりに中納言のほうしになり給ひにしこそあはれなりしか」とある箇所、花山院出家に伴う義懐卿の出家を記すところである。②「雪の山」とは、長徳四年十二月十余日の記事のこと、③⑥は「御まへに候ものどもは琴も笛もみなめづらしき名つきてこそあれ」として楽器の名称が列挙されている箇所である。ここに示された多くの名称を「類標」はまったく採りあげていない。このことは、「類標」が対象としている語句は特殊な名称や難解な語句ではなくて、むしろごく一般的に用いられながらも読解に注意されるものにこそ関心を向けて採集しているらしいという推測を導くものである。⑦は中宮定子の「したわらびこそこひしかりけれ」に対して清女が上句「ほととぎすたつねて聞し声よりも」と応じた条、及び、公任の「すこし春あるこゝちこそすれ」に対し、「そらさむみ花にまがへて散雪に」と応じた条を指している。「連歌」ということはではなく、和歌の本来のやりとりを描く箇所を一括して掲出しているのである。⑧は先の楽器名と同様、特殊な屏風について記す条であるが、これも省略されている。⑨・⑩は「うちとくまじきもの」に記される具体的な様子を総括しているものである。

次に春曙抄の頭注³⁾を採っている例をみる。そもそも春曙抄には

本文をはるかに超える量の頭注と読解の手引きとしての多くの傍注があり、意識的にこれらを排除しつつ作業をすることは知的好奇心があればある程、困難なことである。「類標」編者は禁欲的なまでに語句にのみ目を注いでいたのであるが、ごく稀に頭注が対象となった例がある。これらは単なる錯誤として扱うのではなく、「類標」編者が春曙抄全体に深く親昵していたことを示すものであり、本書が枕冊子読解のための語句採集を基本にしている証左とみるべきであろう。上段に春曙抄頭注、下段に「類標」項目を示した。

- ① 職原抄云凡^ツ国司^ハ者相当五
位已下也 (一ノ五オ) 国司
- ② 荒海及障子といふ是也
(一ノ十九ウ) あら海のさうし
- ③ へせりつみし昔^{むかし}の人もわ
がごとや…… (二ノ十ウ) 芹つみし昔の人
- ④ 網代車^{アジロ}桃華藻花^ニ云^シ莫^レ之^ヲ
時召^よ之^ス (二ノ十六オ) 網代車
- ⑤ 刈槌^カ刈杖^ハ皆前^ニ注江次第二
小書^ニ日^ク…… (四ノ二十六ウ) 刈槌刈杖
- ⑥ 朗詠^ニ云^ク蕭^{シヨウ}会稽^{ケイキ}之^シ過^シ古^コ廬^ロ
(八ノ十六ウ) 蕭会稽之過古廬

- ⑦ ^{イ本}身をかへて天人など
はかうやあらん^{と見ゆる}
ものはとあり (十ノ九ウ) <sup>身をかへて天人など
はかうやあらん云々</sup>
- ⑧ ^{イ本}むねのけとはかり有
て物のけとはなし (十二ノ十二ウ) ^{むねのけ}
- ⑨ それよりありきそめたる
也とそとあり (十二ノ二十四オ) ^{ありきそめたる}

①～⑤は有職故実や古歌に関する頭注であるために、知識欲旺盛な「類標」編者が読解の便を計り採りあげたものと思しい。⑥は春曙抄本文が「せうくわいけいのこびやうをも過にし」と平仮名書きが主であるために、和漢朗詠集を引く頭注を採った方が、かえって「搜索のたより」にかなうと判断したためであり、また、⑦の「イ本」本文は三巻本、前田家本に近く、より鮮明な文意となり、⑧の「イ本」本文は現存の主要諸本は「むね」とあることから、春曙抄頭注をもって初めて理解可能となる、というそれぞの理由で「イ本」採用をしたものであろう。これらは「類標」の採集方法の恣意性を語るものではなく、むしろ春曙抄そのものを吟味しつつ読み進めていたことをよく示し得ているものである。⑨は語句自体は特に注目すべきものではない。しかし、この語句はいわゆる跋文で、春曙抄頭注に「或本^ニ此をはりの詞の跡に」として、枕冊子流布の端緒に言及する一文中に用いられてい

るのである。この例は「類標」編者が春曙抄本文への関心よりも、枕冊子という作品そのものへ興味を抱いて頭注を採集の対象とした好例であろう。

ところで、「類標」の各項と、そこに示された春曙抄の本文、巻・丁数とを照合させてみると、転写の際に生じたかと思われる誤りをも含んで実に多くの齟齬が見出される。それを大別すると、(a) 敬語法の相異 (b) 助詞・助動詞の相異 (c) 用言の活用形の相異 (d) 「類標」の語句省略 (e) 「類標」の語句添加 (f) その他、と類別することができる。これらは必ずしも春曙抄本文を採録する際に生じた異同ばかりではないけれども、語句を採集するときに生じ得る変化、あるいは語句の改変のあり方を通して、「類標」の性格が、別の面から窺い得ると思われるので、以下に各項の実例をあげながら若干の考察を付しておく。

(a) 敬語法に異同のある例

上段に春曙抄本文、中段に「類標」項目、下段に春曙抄本文と同じ本文をもつ系統の本文を『校本枕冊子』によって調べ、その略号(能Ⅱ伝能因所持本系統、三Ⅱ三巻本系統、前Ⅱ前田家本、堺Ⅱ堺本系統)を記し、その頁数も併記した。

古今のさうし 古今の御さうし 能三前 49

ちこくゑの御屏風	ちこくゑの屏風	能三前
山をつくらせ侍らん	山をつくらせたまはん	能三
侍従殿やおはします	侍従殿やおはする	能三前

このような相異箇所は全体で約十例あり、春曙抄に「御屏風」とあるのを「類標」が「屏風」とするような例が七例であることから、それらは「類標」の不注意による「御」の脱落あるいは敬語無視の所為であろう。たゞ、語自体が改変されているもの、とくに「つくらせ侍らん」とあるものを「つくらせ給はん」と改めていることは敬語法の相異、ひいては解釈も変わってくるところであるために、稀な例ではあるが、これは「類標」編者の思い込みによるものではないかと、一応考えておきたい。

(b) 助詞・助動詞に異同のある例

表示法は(a)に同じ

木のはしなどのやうに	木のはしのやうに	能三前堺
うめきずんじつる哥も	うめきずんしたるうたも ^{云々}	能三
ゆるふばかりを	ゆるふばかりそ	能三
例の思ふ人と	例の思ふ人に云々	能三前
花の衣などいひけむ	花の衣になといひにし ^{云々}	能前
かねの音もれいには似ず	鐘の音は例にも似ず	能三

助詞・助動詞の異同は実に多く、枕冊子の諸本にも見当たらないものも多いことから、「類標」編者が春曙抄本文そのものにあまり厳密な注意を払っていないことは明らかで、加えて、右の対照表から共通箇所のみ注目すると、付属語よりも自立語への関心が強かったためではないかと考えられる。春曙抄本文を忠実に取り出すことよりも、春曙抄を用いながら注目すべき語句、しかも細かいニュアンスをもつ助詞・助動詞に比べ、名詞・副詞や動詞などの方に語句としての印象を強く持ったためであろう。

(c) 用言の活用形に異同のある例

動詞については春曙抄の活用形のまま、つまり文中の用法どおりに出す例が多いものの、終止形に改めている例が約二十例ある。数例を示す。上段に春曙抄本文、下段に「類標」項目と巻・丁数を示す。(e)まで同じ。

ゆるぎありきつる	ゆるぎありく	一ノ十二ウ
ひろめきて	ひろめく	二ノ六ウ
かたきにえりて	かたきにえる	五ノ二十八オ
手よくかき	手よくかく	八ノ九オ
居あかせば	るあかす	八ノ二十三ウ

一見して辞書の項目を並べられた感があり、先の(a)(b)と同様に、文の流れの中からいかなる語を依りどころとして把握しようとしているかが明らかになる。全体としてはごく僅かな用例数ではあるが、本文そのままを採り出す意識よりも、語自体への関心の方が強くあることを窺わせるものである。なお、形容詞についての例はなく、形容動詞の例は一例あるが、これは連体形に変えている(「枝さしなともむつかしげなれど」——「枝さしなともむつかしげなる」)。

(d) 「類標」が語句を省略している例

「類標」編者が語句を採集する際に、つねに受け身の態度で臨むのではなく、理解し易いかたちに変えて掲出するという、いわば積極的な採集方法もある。(c)の項はその例に該当するけれども、以下に示す例はやや長い文を一項目として扱え、それを縮約して掲出する点で、「類標」編者がより強い意識で春曙抄に臨んでいることがよくわかるものである。

かればみたるものゝこゑ	かればみたる声	一ノ九ウ
扇ひろうひろげて口にあてゝ笑ひ	あふきをくちに あてゝわらひ	二ノ十八オ
はなたるまもなくかみてものいふこゑ	はなかみて ものいふ	四ノ十九オ
日ひとひとふえふきあそびくらし	日ひとひ あそびくらし	五ノ十一ウ

同様な例は他に十一例ほど見出せる。上下対照させてみると、「類標」編者が語句そのものよりも描かれていた動作に関心が集中し、不要と判断された語を除外しているのである。これまた少ない例ではあるが、春曙抄を読み進めて興味をひいた事項をいったん咀嚼したうえで、採りあげていることから、編者が春曙抄に親しんでいたことが明らかになる。

(e) 別の語を付加したり異なる語となっている例

前項では長い語句を縮約して掲出している例であったが、次に示す例は春曙抄本文に「類標」編者の解釈を加えて示しているものである。

物がたり	昔ものかたり	二ノ八ウ
やすきそくさいのいのり	安くそくさいのねかひ	十ノ十九オ
松の尾	松尾の神	十一ノ十三オ
声めい王のねふりをおどろかす	声めい王の ねふりをさます	十二ノ六ウ

これらは「類標」が春曙抄本文への理解からさらに踏みこんで注釈的言辞を混じえているものと思われる。同様な例はこの他に十数例が拾い出せるが、これらも春曙抄本文に親しみ、自らの解釈を裏打ちしつつ読んでいたことを示していよう。

(f) その他

「類標」本文は奥書に示すとおり春曙抄に依拠しているはずであり、用例の多くは示された本文、巻・丁数と重なるものではあるが、ごく稀に春曙抄には見られない本文を掲げている項目がある。「かんだちめ大臣まで 九ノ四ウ」は、『校本枕冊子』（以下『校本』と略称）二百二十五段「社は」で次のようにあるところである。

よろこふ事いみしかりけり中将は……大臣になさせ給ひて

(六三二頁)

つまり「かんだちめは」能因本系統にはなく、もちろん春曙抄にも「中将は大臣まで」としかないのであるから、三巻本系統を見ないかぎりこの項はあり得ないのである。同様な例として、「まろかれつきて 十ノ二十五オ」がある。傍に記された異文は三巻本系統にしかないものである。また、『校本』二百五十六段「閏白殿二月十日のほとに法興院の」のうち、「みつし・か車・そに」（六九三頁）とある箇所を参照して異文を示しているはずで、また、「七ウ」は三巻本を参照して異文を示しているはずで、また、

さしぬき……き給て……あをくうつくしけにちさう
 地蔵
 井……の御やうにて
 (七一四頁)

とあるところに該当する項目「かしらつきの青くキタ 十一ノ八ウ」、「地藏ほさちの御やうにて 九ノミ」は春曙抄本文からはまず採集不可能なものである。これらは三卷本系統の異本を採用あるいは参照した数少ない例ではあるものの、「類標」が春曙抄に全面的に依拠してはいないことを示すものである。

以上の各項を簡単にまとめると次のようになろうか。

- 枕冊子の表現内容自体への関心が強く、したがって、春曙抄本文にはあまり厳密には対応していない。
- 自立語への関心も強く、一たん咀嚼した後に表記することが多い。
- 編者による思い込みでの改変がままある。
- 動詞を掲出する際、終止形に改めることがある。
- 長々しい語句を解釈し、縮約して掲出することがある。
- 注的な表現に改めることもある。
- 他本、とくに三卷本系統の本を参照する、いわば学問的姿勢が窺われる。

(二) 書陵部本「枕草子類標」について

本書の題簽は、「紫 和 讚 辨 中 枕 異 枕 蜻 徒 類 標」とあって、多くの日記の類標などと合冊、整理されている。

一丁表に凡例として各作品の依拠した本を記す。枕冊子についてみれば春曙抄本であると明記され、「異本枕草子類標」は界本系統の「後光厳院宸翰枕草子 類従本第四百七十九上下」に依っていると記されている。前章の「類標」(以下、これを「類標(甲)」)、本章の「類標」を「類標(乙)」と称する)と比べると、表記面は多くは平仮名、掲出方法は主に一単語という点が本書の形式的特徴であることに、まず気付く。また、五十音順の各項目について多くの作品の中から採集された語句が作品単位に並べられているので、若干の不向きがある。採集語句は約一二五〇で、「類標(甲)」にはるかに及ばない。五十音別の採集項目数は次の表のとおりである。参考までに括弧内に「類標(甲)」が掲げた項目と一致しているものの数を示しておいた。

あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら
80 (20)	108 (41)	40 (17)	31 (10)	38 (15)	56 (17)	25 (11)	26 (9)	4 (1)
い	き	し	ち	に	ひ	み	り	
49 (19)	21 (3)	62 (17)	13 (7)	6 (1)	54 (20)	36 (17)	3 (0)	
う	く	す	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	る
45 (12)	47 (13)	44 (10)	29 (18)	7 (3)	28 (9)	14 (2)	18 (6)	1 (1)
え	け	せ	て	ね	へ	め	れ	
5 (3)	24 (7)	15 (8)	14 (7)	17 (6)	7 (3)	8 (3)	1 (0)	
お	こ	そ	と	の	ほ	も	よ	ろ
48 (13)	54 (9)	19 (10)	34 (13)	6 (4)	23 (6)	25 (4)	18 (5)	6 (0)

わ 13 (3) る 4 (2) ゑ 11 (2) を 12 (3)

右の表からも「類標(甲)」と「類標(乙)」とは各々独自に編まれたことがわかるが、語句採集の傾向としてはほぼ同様な趣がある。ただ、掲出された項目を仔細に検討すれば、「類標(甲)」とは相異なる、あるいは共通する注意すべき点が見出せるので、以下に略記する。

(1) 形容詞を採る例

「類標(甲)」は動詞をとりあげる際に終止形に改める例があったが、「類標(乙)」にとられている数少ない動詞についてみると、同様な傾向が窺える。ところが、形容詞については両書は対照的な扱いをしているのである。「類標(甲)」でももちろん、形容詞に注目しているが、それを単独で掲げることはほとんど無かった。それに対し、「類標(乙)」では形容詞のみを単独で、しかも終止形に改めて掲げている点に大きな相違点が見出されるのである。掲出された形容詞は三十三語。そのうち春曙抄でも終止形で用いられているのは僅かに三語で、他は別の活用形で用いられている。例えば、「あつかはしげなる」「もどかしき」「物しげに」「やさしがりて」という形容詞の派生語を採集する際にも、各々、「あつかはし」「もどかし」「ものし」「やさし」というものとの形容詞に戻して掲げている。「類標(乙)」は「類標(甲)」に比べ、

より強い関心を形容詞に抱いていると判断してもよさそうである。

(2) 注を付記する例

「類標(甲)」には語句を分かりやすくするために漢字を宛てたり、直前の語句を小書して付記する例はあるものの、明らかな注記を示す例はない。これに対して、「類標(乙)」には注記のある例が十一例見出せる。ただこれらの多くは、春曙抄の注記や傍注を参照しているのであるが、中に例えば、「うかべる

そらにうかべる也」「やせたるさま也」からめき」「調ほら」などは該当記事がない。「類標(乙)」編者の使用した春曙抄に書き込みがあったものか、あるいは編者の読みを併記したものかと思われる。

(3) 春曙抄本文を縮約する例

「類標(乙)」の編者が春曙抄本文を縮約把握して採集する例で、「類標(甲)」にも通うものではあるが、例えば「かひをいとたかく俄にふき出したるこそ」とあるのを「かいふく」として示したり、「まつを高くともし」を「まつをとます」とするもの。他には二三しか見出せない。このことは、「類標(乙)」が春曙抄に密着しながら最初から単語を採集の基本として臨んでいたことを裏付けるものといえよう。

(4) 疊語を採る例

「類標(乙)」には疊語が二十三例採られている。もちろん「類標(甲)」にも採られてはいるけれども、「類標(乙)」では単独での例が目につくのである。いま、共通している語について両者がどどのように相異しているか、例をいくつか示しておこう。上段に「類標(甲)」、下段に「類標(乙)」を示す。

あはくしき女	あはくし
くるくやすらかに	くるくと
しれくとうちゑみ	しれく
はえくしう思ふなるへし	はえくし
ひよくとかしましく	ひよく

相異している例のみを示したのであるが、ここから、「類標(甲)」は語を含む事柄、状況そのものを採ろうとしているのに対し、「類標(乙)」はあくまでも語そのものを採ろうとしている姿勢のあることが確認される。単語採集を基本方針とする所為というべきであろう。

(三) 東大本「枕草子類語」について

東大本「枕草子類語」(以下、「類語」と記す)は、「蜻蛉日記

類語」「撰集抄類語」と合冊になっている。蔵書印は「東淵文庫」「陽春廬記」「南葵文庫」「東京帝国大学図書印」であり、東淵文庫主から小中村清矩(号、陽春廬)、南葵文庫を経て大正十三年七月に東京大学に寄贈された本の一であることがわかる。本書は書写の乱雑さ、形態の不統一、書入れ、不完全項目等から、一見して完成稿ではないと思われる、虫損も多いことから、従来から研究に利用されたものとは言い難いような書物である。本書も前二書と同じく春曙抄に依ってはいえるが、項目立てはいろいろは順になっている。

そこでまず、「類語」の概要を知る手がかりとして(一)でとりあげた「いやしげなる物」の段を対象に比較してみよう。上段に「類標(甲)」、中段に「類標(乙)」、下段に「類語」の項目を示す。

いやしげなる物	いやしげなる物
式部のそのの癖	・
黒き髪のすちのふとき	・
布屏風のふりくろみたる	ぬの屏風
桜の花多くさかせて	・
こふん朱砂 <small>スサ</small>	こふん・すざ <small>胡粉</small>
色とり多かきたる云々	・
やり戸	・
づし	・

るなかものはいやしけなり

るなかもの

菟はりの車のおほひ

むしろはりの車のおそひ

けいしの袴

検非違使の袴

いよすのすぢふとき

いよすの筋ふとき

法師のふとりたる

ほうし子

出雲むしろのたたみ

いつもむしろ

いつもむしろのたゞみ

〔むしろ いつもむしろのたゞみ〕トモ

いかにも「類語」は網羅的に採集している「類標(甲)」に近いことがわかる。しかし、例えば、「な」の項は卷三以下、「は」は卷六以下、「に」の項は卷九以下がなく、「し」に至っては脱落してしまっているのであるから、現存本での総項目数は約一九三〇であるが、本来はもっと多くの語句を対象としていたものと推測される¹⁰⁾。採集方法も基本的には一単語を掲げる形式が主であるものの、文のかたちで示すところもまま見られ、「類標(甲)」に等しい。ただ、中には「織物は」の一段全文、またはそれに近い量の文を掲げる項目があるところから、整理される前段階の感を得られないものである。

また、「類語」は「類標(甲)」と同様、事典的項目が見られる。しかし、「類語」の十三例のうち一例(「稻荷詣の事 八ノ八オウ」)を除いてすべて卷三の四十二丁に集中している。いささか奇異の感がある。

「類語」も春曙抄に依拠してはいるが、表記については必ずし

も忠実ではなく、一旦理解した後記しているようである。「類標(甲)」に比べ、付記された巻・定数は大旨正確で、この点からみれば良好である。

春曙抄頭注や傍注が語句の下に付記されて掲出されていること「類標(乙)」に通う採集態度である。ただし、次の二語を採っているのは「類語」だけであるので注目される。

を 助辞 一ノ二十四ウ

は 助辞 児ともそは 十ノ十二オ

「助辞」である旨を添えて掲出しているところに、編者が読解上注意を要するものであると判断したことを示している。語法に触れている数少ない例である。

結

枕冊子の語彙数は宮島達夫氏の『古典対照語い表』によると、異なり語数で五二四六、のべ語数三二九〇八である。春曙抄をもとにした三種の索引は、現行の索引類と形態も違っているものの、遠く及ばない成果であったかもしれない。しかし、春曙抄を読み進めながら関心をひいた語彙・語句を積極的に採集し、後日のために作製しようとした姿勢は注目に価しよう。

近世国学者である小山田与清が類字函を考案し、語彙採集・索引編集にいかにか情熱を注いだかは、彼の日記「擁書楼日記」を垣

間見るだけでも十分に窺い知れるところである。¹¹⁾ その周辺にこの三種の索引を置いてみることは可能であり、枕冊子研究史のうちの国語学的研究の初期のものとして扱われるべきであろう。

注

- (1) 石田穰二氏「研究史と研究の現状」〔『枕草子必携』所収〕
- (2) 田中重太郎氏「『枕草子』伝本研究の現段階」〔『月刊文法』昭和四十六年二月号〕
- (3) この数字は掲出されている項目を単純に数えたもので、仔細にみると重複している語句（「えせ草」「年のかぎり」等）や、二語以上の語句を一項目としているものを別の項でその中の一部を掲出している例などがあり、多少の変更はある。
- (4) 『北村季吟古註釋集成 枕草子春曙抄』の影印本に依る。以下、春曙抄本文は本書を使用し、巻数、丁数もこれに依って記す。
- (5) 頭注のみでなく、傍注が一例（「朝座 二ノ二十四ウ」）ある。
- (6) 敬語表現がなくなっているものとしては次のような例がある。
「やうきにもらせ給ひて」→「時の程にもなりぬ」
「やうきにもらせ給ひて」→「時のほどにもなり侍ぬべけれ」→「時の程にもなりぬ」
- (7) 正しくは、「十ノ四ウ」とあるべきところ。
- (8) 田中重太郎氏編著『校本枕冊子』の頁数。以下、二例も同じ。
- (9) 「類標」奥書にいう「春曙抄を土代とせり」の「土代（台）」というのは、まずは春曙抄を語句採集の基本本文として、なおかつ他の本を見たということをも含むのかもしれない。「搜索のたよりよ

ろしければ」というのも、そう考えると、含みのある文言ではある。
 (10) 欠けている箇所を巻数によって一覧すると次のようになる。
 に（九以下）・ほ（六以下）・よ（七以下）・た（九以下）・な（三以下）・ら（九以下）・ま（四以下）・け（十一以下）・あ（一・十二ノミアリ）・さ（七以下）・み（四以下）・し（ナシ）・す（三以下）

(11) 拙稿『浜松中納言物語』の研究——「目録」「類標」をめぐって——（財団法人 古代学協会編『後期撰関時代史の研究』所収）